

優秀賞

「大切な命を輝かせて」

登米市立中田中学校 二年 千葉 咲笑

シャトルを打ち上げ、スマッシュを決める。私は勉強や部活動に全力で挑んでいる。バドミントンは、市新人中総体で個人ダブルス優勝。県大会優勝や東北大会入賞を目指して、猛練習をしている。そんな私は、かけがえのない命の尊さを心から実感している一人だ。

二〇〇八年十二月一日、私は誕生した。母や家族は喜びと同時に、一気に心配と不安を抱えていた。なぜなら、私が「心室中隔欠損症」という障がいをもつて産まれたからだ。

幼稚園の入学直前四歳の時、病院の先生から、「このままでは、人工弁をつけることになり、大人になるまで三度の手術をしなくてはいけません。その前に閉鎖手術をすれば、一度で済むので、病院ではそれをお勧めします。」と、話されたそうだ。両親は悩んだ末に苦渋の決断で、一度で済む閉鎖手術を選んだ。

私は入院中、ベッドの上で自由帳に絵を描きながら、「い

つ両親が来てくれるんだろう」と、手を止めでは繰り返しドアを見て、待ち続けていたのを覚えている。幼い時のことながら来てくれたときの嬉しさは言葉に表せないくらい本当に

嬉しかった。母の大きなバッグからは、絵本やDVD等が出てきて、私を喜ばせた。絵本を読んでくれる母の声は落ち着いていて、私を安心させた。いつの間にか眠ってしまうほど心地よかつたように思う。

入院中の私が一番樂しみにしていたのは、病院内を両親と散歩することだった。ただ歩くだけだったが、初めて見るもの一つ一つに好奇心旺盛で心引かれた。病院には、色々な人がいた。手が片方無い人、足が無い人、医療用帽子を被っている人等。私は見て感じたことを、母にたくさん質問した。

「何であの人は、眼が白いの?」「何であの人は、動きがおかしいの?」等、相手の事情や状況、立場も思いやれずに疑問をぶつけた。まだ幼稚だった私には、何もかもが不思議だった。母は、私がいろいろな事情があることを察していただけるよう、一つ一つについて丁寧に教えてくれた。私が質問した度に、母は心の中で「次は何を聞いてくるだろう。どう応じてあげるのが一番良いか。」等と悩み、プレッシャーを感じていたかもしれない。だが、いつも心から受け止め、最後には毎回「咲笑も頑張ろうね!」と、笑顔で励ましてくれたのだ。

母との対話はとても嬉しかったし、少し恐かったようにも感じた。それは、まだ手術が終わっていなかつたからだと思う。手術の前後は何度も薬を飲んだ。それは、時間が経つと

嘔吐がある薬。嘔吐をすると、それを緩和するために別の薬を飲む。しかし、入院中は「もう少し、あともう少しだけ頑張れば、友達にも会えるし、家族とも過ごせる。」という気持ちで乗り越えようと努めていた。

手術前日は恐怖心のみ。麻酔後に目を覚ましてみると、もう既に四日間が経過していた。私は、約八時間の手術を経て無事成功した。その後は、集中治療室で身体にはたくさんの管。身体が思うように動かず、回復に向けてリハビリもした。最初は自分で寝返りをうつことも困難だったが、やつとのことで歩くまでに戻った。待ちに待った帰宅。家族・友達に会えた時の喜びは、今でも忘れられない。

私はこの体験を通して、私を産んで大事に育てくれた両親に「本当にありがとう！」と心から感謝したいと思った。そして、私の名付け親は祖母。私が笑顔のあふれる人生で周りの人も幸せにできるよう願いを込めて咲笑（さえみ）となつた。家族の温かい愛情に包まれて私は自分らしく生きる喜びをたくさん感じることができている。家族が一生懸命頑張っている姿を見ると、私も精一杯生きなければと思う。家族への感謝の思いを少しづつ行動で示し、恩返しできる人になりたい。今は、看護師や介護関係の仕事に関心をもつている。苦しんでいる人に寄り添い、人の役に立てるような進路に向かい力強く歩みたい。